

THE ADVENTURE OF THE CRIME CORPORATION
AND OTHER RADIO MYSTERIES

by Ellery Queen

(2018)

Edited by Yusan Iiki

目次

暗闇の弾丸の冒険	5
一本足の男の冒険	37
カインの一族の冒険	71
犯罪コーポレーションの冒険	107
奇妙な泥棒の冒険	131
見えない手がかりの冒険	153
見えない時計の冒険	187
ハネムーンの宿の冒険	217
放火魔の冒険	249
善きサマリア人の冒険	283
殺されることを望んだ男の冒険	315
ラジオ版『エラーリー・クインの冒険』エピソード・ガイド	341

暗闇の弾丸の冒険

The Adventure of the Blind Bullet

登場人物

探偵の

その秘書の

エラリーの父親で市警本部の

クイーン警視の部下の

億万長者の鉄道王の

ファーナムのボディガードの

ファーナムの召使いの

ファーナムの姪にして遺産相続人の

ジョアンナの婚約者の

メイン州行き急行列車の

エラリー・クイーン

ニッキイ・ポーター

クイーン警視

ヴェリー部長刑事

キップ・ファーナム

ブロッコ

マックス

ジョアンナ・ファーナム

ディック・ホーリー

車掌

放送 一九四〇年六月三十日

場面 豪邸——クイーン家のアパートメント——私用車両

第一場 都心にあるファーンナムの豪邸

(ファーンナムの部屋で、ブロッコがファーンナムの銃に油をさしている。ファーンナムは傲慢で横柄な中年の大男。今は電話で話している最中)

ファーンナム あの野郎もついてないな。おれの邪魔をしたのが運の尽きさ、ホリス。裏切つてしまえ……かまわん。それから、ストラザースに伝える。明日の朝、メイン州の狩猟小屋にいるおれに電話するように、つてな。その頃には、あつちに着いているはずだ。(電話を切る)さてと、こっちは片づいたぞ。銃の手入れは終わったか、ブロッコ？

ブロッコ (上品とは縁のないタフなイタリア人) 上々でさあ、ボス。(遊底を数回スライドさせる)

ファーンナム (くつくつ笑って) おいばれ銃よ——忠実なる友よ！ すばらしき武器よ。ブロッコ、銃の油をこっちに寄せ。

ブロッコ へい、ボス。今度の旅行で、あなたよりあたしの方がでかい獲物を仕留める方に、いくら賭けますかい、ボス？

ファーンナム おまえの一週間分の給料だ、ブロッコ！(笑って) 死ぬ前に一度くらいは、おまえより巧く撃つてみせるさ。

ブロッコ　そいつはどうでしょうかねえ。でも、「死ぬ」なんて言わないでくださいよ、ファアンナムさん。あなたが死んじまったら、あたしは職を失うわけですからね！

ファアンナム　おれの死体^{ボダイ}が埋葬されちまったら、おまえはおれの身体^{ボダイ}を警護^{ガード}することはできないからな。……なあおい、銃ばあさんよ、あなたの銃身はジョアンナの瞳みたい

に輝いているじゃないか。(ドアが開く。声が鋭くなる) マックスか？ どうした？
マックス　(ウィーン出身の外国人——冷静にして有能な男) 手紙です、ファアンナムさま。たった今、使用人棟の表口ドアの下にあるのを見つけました。

ファアンナム　通用口に、だど！ 寄こせ、マックス。

マックス　はい、旦那さま。(ファアンナムは封筒を裂いて開ける)

ファアンナム　(手紙を取り出しながら) そうだ、マックス。(マックス「何でしょうか、旦那さま？」)

おれの買ったばかりの狩猟服を荷物に入れておくのを忘れるなよ。

マックス　かしこまりました、ファアンナムさま。(マックスは退出する)

ファアンナム　さて、この謎めいた手紙には、いったい何が書かれているのかな？(手紙を読むと、わずかに驚きの声を上げるが、すぐに笑い出す) ブロッコ——こいつを読んでみる！

ブロッコ　何ですか？(ブロッコが読む) 何がそんなにおかしいんですかい、ボス？

ファアンナム　(くつくつ笑いながら) たぶん、この国には、頭のネジが外れたやつが五百万人いるんだよ。で、そいつらが全員、おれに手紙を寄こすというわけだ！

ブロッコ　(けわしい声で) ファアンナムさん、どうもこいつは気に入りませんな。

フアーナム ふん。手紙をこつちに寄こせ、ブロッコ！(手紙をくしゃくしゃにして) こんなもの行き先は屑籠しかないな。(離れた位置でドアが開く音がする)

ジョアンナ (社交的な若い女性) キップ叔父さま！ お邪魔してよろしいかしら？

フアーナム かわいいジョアンナ！ さあさあ、入ってくれ。

ジョアンナ あなたも入って、ディック……。この聖域に、あたしのハンサムな彼氏も入れていいかしら、キップ叔父さま？

ホーリー (バックベイ(ボストンの上流階級が住むエリア)) の住人) やあ、フアーナムさん。

フアーナム (不機嫌そうに) よう、ホーリー。おまえは、いつこつちに来たんだ？

ホーリー さつき、ボストンから飛行機で着いたところです。ジョアンナから聞きましたよ、フアーナムさん。あなたが昼前に、狩猟旅行に行くことにしたって。

ジョアンナ ディックも一緒に行つてかまわないでしょう、叔父さま？

フアーナム (そつけなく) 歓迎するよ。ブロッコ、銃の手入れはだいたい終わったな？ (ブロッコはうなり声で答える)

ジョアンナ キップ叔父さま、誰かが通用口のドアからあなた宛ての手紙をすべり込ませたって、どういふことなの？ マックスが教えてくれたのだけど——

フアーナム (すばやく) 何でもないんだ、ジョアンナ。本当に、何でもないんだ。

ジョアンナ 何も問題はないと、本当に思っているの？

フアーナム (笑いながら) 心配性だな！ ブロッコ、その銃を書斎に持つてこい！ (フアーナム

は出て行く)

ジオアンナ ブロッコ！ 叔父さまへの手紙には何て書いてあったの？

ブロッコ 自分で読んだ方がいいですね、ファーナムのお嬢さん。屑籠の中です。

ジオアンナ 取り出してちょうだい、ディック！（ホーリーは言われた通りにする）

ブロッコ そいつはかなりいかれてますよ、ファーナムのお嬢さん。あたしは気に入りませんな。
ファーナム（書斎から声をかける）ブロッコ！ 銃を持ってこいつて言っただろう！

ブロッコ（あわてて）今行きます、ボス！（小声で）ファーナムのお嬢さん、あなたが何とかしてくれませんかね！（ブロッコは出て行く）

ホーリー これがその手紙だよ、ジオアンナ。

ジオアンナ こっちにちょうだい、ディック！（読み上げる）「親愛なる……ファーナム……殿

……」。ディック！ これって——

ホーリー（うんざりしたように）よくある、頭のいかれたやつがたわごとじゃないか。どこかに
行こう、ジオー。そして……お喋りをしよう。一週間ぶりだというのに……。

ジオアンナ たわごとですって！ ディック・ホーリー、ときどきあなたは、まるで——キツプ

叔父さまのように先が見えなくなるのね！（泣き出す）

ホーリー でもジオアンナ、こんなのは今に始まったことじゃないじゃないか！ きみの叔父さ
んみtainな地位にいる連中は、いつもこんな手紙を受け取っているのだからね。あの人だつて、
もう何百通も受け取って——

ジョアンナ あたし、この手紙だけは怖いものよ。(不意に) デイック、あたし、探偵に相談するわ。

ホーリー 探偵だって！(笑う) ブロッコでは力不足なのかい？

ジョアンナ あら、ブロッコはボディガードとしては文句なしよ。でもデイック……この件は巧妙さが要になりそうなの。叔父さまの書斎のドアの前に立っただけでちやうだい！ あたしが電話するのを聞かれないのよ。

ホーリー わかったよ、ジョアンナ。でも、誰に電話をするつもりなんだい？

ジョアンナ ニューヨークで一番の探偵よ。(受話器を取り上げて) 番号案内ですか？ エラリー・クイーンさんの電話番号を教えてください！

第二場 クイーン家のアパートメント

ジョアンナ ええ、ホーリーさんは、あたしの婚約者です、クイーンさん。

ホーリー 今回のことは、気にするだけ無駄でしょう。あなたもほくに賛成してくれると信じていますよ、クイーンさん。

エラリー・クイーン 間もなくわかりますよ、ホーリー君。ニッキイ、メモをとってください。

ニッキイ・ポーター (ため息をついて) とつくに準備はできていますわ、ミスター・クイーン。始めてください。

クイーン警視　ちよつと待ちたまえ。ファーナムのお嬢さん——きみがそんなに心配している叔父さんというのは——鉄道王のファーナムなのかね？

ジョアンナ　そうです、クイーン警視さん。

ヴェリー部長（畏敬の念を込めて）あの億万長者の超大物おおもんか！

ニッキイ　それなら、あなたはいつも、「全米で最高額の遺産相続人」と呼ばれているジョアンナ・ファーナムに違いないわね！

ジョアンナ（うんざりしたように）それは、あたしのことですけど。キップ叔父の姪にしてたつた一人の相続人だというのは、ときどきひどい重荷になるのよ。

ヴェリー　そんな重荷だったら、あたしはいくらでも我慢できますけどね。

エラリー　ファーナムさん、あなたは手紙について言っていましたね。ちよつと、ぼくに見せてくれますか？

ジョアンナ　これです、クイーンさん。びっくりして、気を失うかと思いましたが。

エラリー　ふーむ。どこにでもある安物の便箋に、鉛筆書きの活字体の文字……封筒には消印もないし、手がかりになるようなものもない……

警視　大きな声で読んでくれ、せがれよ。

エラリー（ゆっくりと）「親愛なるファーナム殿。本日土曜の午後、きつかり五時五十九分に、貴殿は死ぬであろう」

ニッキイ　きつかり——何時いつですつて？

ホーリー（あくびをしながら）どうして女つてやつは、こんな馬鹿げたことを大真面目に取り上げて感情的になるのでしょうかねえ？

警視 待ちたまえ、ホーリー君！ セがれよ、他にも何か書いてないか？

エラリー 追記が一つ——こう書いてあります——「時刻は東部夏時間である」と。

ヴェリー ふざけたやつですな！ 署名はありますか、クイーンさん？

エラリー ないな、部長。東部夏時間の午後五時五十九分か！ どう思います、お父さん？

警視（ゆっくりと）五時五十九分のくだりがなければ、いかれたやつの手紙だと言うところだが。

このくだりがあまりにもいかれすぎているので、かえって正気に見えてしまうな。

ジオアンナ あたしが言った通りでしょう、ディック？

エラリー（考え込むように）午後の五時五十九分きっかりに、あなたの叔父さんはどこにいるの

ですか、ファーンナムさん？

ジオアンナ あたしたち全員が、叔父の私用車両にいるはずですよ。一時四十分発のメイン州行き

急行列車に連結された、特別仕立ての車両です。

ホーリー ほくたちはメイン州にあるファーンナムさんのロッジに行くんだよ、クイーン。数日ほ

ど狩りをするんだ。

ヴェリー ところで、その一行には誰と誰がいるのですかね？

ジオアンナ キップ叔父、ホーリーさん、それにあたし。あと、叔父のボディガードのプロック

と、叔父の召使いのマックスです。

第五場 同じ場所、その翌日

(ニツキイとヴェリー部長がロッジのポーチに腰を下ろしている。エラリーはそこを行ったり来たりしている)

ニツキイ エラリー・クイーン、ポーチを行ったり来たりするの、やめて、くださる？ ヴェリー部長、あなたも目ざわりでしょう？

ヴェリー あのお方は大自然を楽しんでおられるのですから、わかってあげなければいけませんな、ポーター嬢ちゃん。(詩を吟じるように) 小鳥のさえずりに耳を傾けようではないか。(深く息を吸って) かぐわしき大気を嗅いでみようではないか。さあ、クイーン殿——嗅いでみようではないか！(ニツキイが笑う。エラリーはうろつくのをやめる)

エラリー 部長、そいつはほくにとつて何の役にも立たないな。いいかい、ニツキイ、ほくはこの事件について考えているのだよ。ちよつとばかり魅力的な謎じゃないか。

ニツキイ わたしが考えられるのは、これからハネムーンを楽しむもうとする女性が殺された、ということだけよ。もしこの事件が魅力的だと感じるのだったら、わたしはマクベス夫人ということになるわね。

ヴェリー (くすくす笑う) 警視とあたしは、手配中のギャングの足どりを追っかけて、このウイング湖の近くに来ていたんですよ。地元の巡査は殺人事件を抱える羽目になったことを知ると、

警視に向かつて「クイーン警視」って言って、「今日のはあつしの座骨神経痛がひどく痛みましてな」って言って、「体が動かせそうにないのです」って言って、「それで——ええ——あなたとヴェリー部長で、あつしの代わりに、この殺人事件を調べてもらえませんか？」って言ったんです。そして病気の牛みたいなうめき声を上げると、禿げ頭に布団をかぶってしまったんですよ！（ヴェリーはゲラゲラ笑う）

ニツキイ　そしてもちろん、警視はその頼みを断れなかつたわけね。

エラリー　（くすくす笑う）当然だよ、ニツキイ。クイーン家の血がそうさせるのだ。

ヴェリー　（真面目になつて）血といえば、クイーンさん、向こうに横たわっている女は、狩られたキジバトみたいでしたよ。

エラリー　中に入るとするか。まだ父さんが被害者の亭主に事情聴取をしているのなら、見てみよう。（みんなでロッジの中に入る）ジャック・ベンソンは（B & B兵器会社）の若き共同経営者で、昨夜遅く花嫁と共にオフィスを出て、こちらに車で来た。と、こんなところだったかな、部長？

ヴェリー　ええ。このロッジはバレット・シニア氏のものだそうです。彼は昨晚、仕事でワシントンに向かったようですが、ベンソンが働くオフィスにメモを残しておいたんですよ。ここをハネムーンでいちゃつくのに使つていい、と。

ニツキイ　何というハネムーンになつてしまったのかしら！（三人が殺人のあつた部屋に入ると、そこではジャック・ベンソンが生気の失せた声で、クイーン警視のきびしい事情聴取を受けている）

エラリー やあ、お父さん。最速ですつ飛んで来ましたよ。

警視 おお、エラリー、ニッキイ。ちよつと失礼するよ、ベンソン君。(声をひそめて) おい、せがれ、ヴェリーからこれまでのいきさつを全部聞いておるな？

エラリー ええ、お父さん。それで、どうしてぼくを呼んだのですか？

ニッキイ 朝方、ヴェリー部長から電話があつて、今すぐこちらに車を飛ばして来いと言われたときには、ちよつとびびくりしましたわ、警視さん。

警視 (小声でくすくす笑う) もし呼ばなかつたら、おまえはわしを許さなかつただらうからな、せがれよ。実は、この事件には変わった点がいくつもあつてな。おまけに、そのうちの一つは、とびきり変わつておるのだ！

ニッキイ (おぞおぞと) あの……ベンソン夫人の死体つて——この……もりあがつたシートの下にあるの？(ヴェリーがうなるようにうなずく) それに、ご主人の方は……表情がうつらだわ……

エラリー ショックでほんやりしているのだ。かわいそうに。

警視 ここまで戻すのも一苦労だったよ。(やさしいが断固とした口調で) ベンソン君。(間を置いて) ベンソン君！

ジャック (ほんやりと) はあ……何です……そっちのあんたら、誰？

警視 ベンソン君、しつかりするんだ。話の続きを聞かせてくれたまえ、いいかね？ わしの言っていることがわかるかな？

ラジオ版『エラリー・クイーン』の冒険』エピソード・ガイド

飯城勇三

※ラジオ版『エラリー・クイーン』の冒険』のうち、筆者が読むことのできたエピソードのガイド。
※内訳は、脚本自体を読むことができたのが十五作（邦題に☆印がついているもの）、活字化が十六作、漫画化が一作。

※『犯罪カレンダー』収録作のように、クイーン自身が小説化したものは外している。

※既刊のラジオドラマ集『ナポレオンの刺刀の冒険』、『死せる案山子の冒険』（共に論創社刊）、および本書の収録作も外している。

※原題の「[The Adventure of]」は省略。

※活字化作品の本国でのデータはF・M・ネヴィンズ『推理の芸術』（国書刊行会）参照。

※略号は以下の通り。HMM〓ハヤカワ・ミステリマガジン（早川書房）／EQ誌〓EQ（光文社）／HPM〓ハヤカワ・ポケット・ミステリ／HM文庫〓ハヤカワ・ミステリ文庫／創文〓創元推理文庫

ガムを噛む百万長者の冒険

The Gum-Chewing Millionaire (1939/06/18)

①「大富豪殺人事件」H M M 1972/12 / ②「大富豪殺人事件」H P M 「大富豪殺人事件」 / ③「殺された百万長者の冒険」創文「エラリー・クイーン」の事件簿2 / ④「大富豪殺人事件」H M 文庫「大富豪殺人事件」

【物語】

大富豪のジョーダンから助けを求める手紙を受け取ったエラリー。ジョーダンは、自分が財産目当ての妹の婚約者に命を狙われていると語るが、同時に、身を守るために毎週遺言状を書き換えて、誰に遺産を与えるかわからないようにしているとも言った。

だが、それでもジョーダンは殺されてしまう。犯人は、遺産が手に入る保証はないのに、なぜ殺人を犯したのだろうか？

さらに不思議なのは、犯行後に現場に舞い戻った犯人が、屑籠の中身を処分しようとしたこと。中には、チューインガム好きの被害者が捨てたガムの噛みかすしかないというのに……。

ところがエラリーは、ここで「犯人がわかった」

と宣言し、聴取者に挑戦するのだった。

【鑑賞】

本作は初回に放送されたエピソード。クイーン研究家のF・M・ネヴィンズは高く評価していないし、私も同じ評価である。ただ、おそらくクイーンは、初めてラジオでの犯人当てに挑む聴取者のため、意図的にシンプルにしたのだと思われる。

そして、「入門編」として見ると（聞くと）、かなり出来は良い。例えば、重要な手がかりとなる、ガムを包んでいた紙——野球のスコアカード。当時のアメリカの人気スポーツである野球が手がかりになるのだから、聴取者は引き込まれたに違いない。これは、「犯行現場が東京で、手がかりは甲子園球場で行われた阪神—巨人戦のスコアカード」と置き換えると、よくわかると思う。

その上、いかにもクイーンらしく、「遺産相続人を頻繁に変える被害者を殺した理由は？」という魅力的な動機の謎も盛り込み、鮮やかな解決を見せている。犯人当てミステリの初心者に向けたシリーズの最初のエピソードとしては、充分以上の出来と言えるだろう。

十三番目の手がかりの冒険☆

The Thirteenth Clue (1939/08/20)

【物語】

ブロードウェイの見世物小屋で奇妙な盗難が次々と起こる。盗まれた十二の品は、ロウソク、白ネズミ、オウム、一組のランプ、二個のサイコロなど、いずれも価値がないものだった。

捜査に乗り出したエラーリーの前で、小人のズグが密室で殺される。彼女は病的なまでに用心深く、自室のドアには特注の錠をつけ、窓には鉄格子をはめ込み、部屋には誰も入れようとしなかった。理由は、自室に大金を隠していたためで、どうやら犯人は、その大金を狙ったらしい。

エラーリーはその場で密室の謎を解き、連続盗難事件の目的をあげ、犯人を指摘する——が、新たな手がかりが発見され、犯人は別にいることがわかった。

仕切り直したエラーリーは、ある罫をかけ、大金はベッドの脚に隠してあることを突きとめる——が、そこは空っぽだった。犯人はすでに大金を盗み出していたのだ。

しかし、ここでエラーリーは、十三番目に盗まれた大金が重要な手がかりだと言い、聴取者に挑戦するのだった。

【鑑賞】

このエピソードで真っ先に目を惹くのは、密室の謎。といっても、密室殺人のことではない。このトリックは大したことはないし、作者もそれはわかっている（ただし、被害者にある勘違いをさせるアイデアは上手い）。ところが、大金の盗難が発覚した瞬間に、再び密室状況が浮かび上がってくるのだ。被害者は部屋に誰も入れなかったし、殺人の前後も、一人きりで部屋にいた人物はいなかった——ならば、犯人はどうやって金を盗んだのだろうか？ この不可能状況を手がかりにして、盗難が可能だった唯一の人物を指摘するエラーリーの推理は、実に鮮やか、かつ意外性満点である。

さらに、何の価値もない十二の品物を結びつける推理もまた、鮮やか、かつ意外性満点。本作は、一時間バージョンの質の高さを証明する佳作と言えるだろう。

〔著者〕

エラリー・クイーン

フレデリック・ダネイとマンフレッド・B・リーの合作ペンネーム。従兄弟同士で、ともにニューヨーク、ブルックリン生まれ。1929年『ローマ帽子の謎』で作家としてデビュー。ラジオドラマの脚本家やアンソロジストとしても活躍。主な代表作に『ギリシャ館の謎』(32)、『エジプト十字架の謎』(32)の〈国名シリーズ〉や、『Xの悲劇』(32)に始まる〈レーン四部作〉などがある。また編集者として「エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」を編集、刊行した。

〔編訳者〕

飯城勇三 (いいき・ゆうさん)

宮城県出身。エラリー・クイーン研究家にしてエラリー・クイーン・ファンクラブ会長。〈本格ミステリ大賞・評論部門〉の第11回を『エラリー・クイーン論』(論創社)で、第18回を『本格ミステリ戯作三昧』(南雲堂)で受賞。他の著書は『鉄人28号』大研究』(講談社)、『エラリー・クイーン Perfect Guide』(ぶんか社)およびその文庫化『エラリー・クイーン パーフェクトガイド』(ぶんか社文庫)、『エラリー・クイーンの騎士たち』(論創社)。訳書はクイーンの『エラリー・クイーンの国際事件簿』と『間違いの悲劇』(共に創元推理文庫)、F・M・ネヴィンズの『エラリー・クイーン 推理の芸術』など。論創社の〈EQ Collection〉と原書房の〈クイーン外典コレクション〉では、企画・編集・翻訳などを務めている。他に角川文庫版〈国名シリーズ〉の解説など。

はんざい
犯罪コーポレーションの冒険 ぼうげん ちょうしゅしゃ ちょうせん
聴取者への挑戦Ⅲ
——論創海外ミステリ 213

2018年6月20日 初版第1刷印刷

2018年6月30日 初版第1刷発行

著者 エラリー・クイーン

編訳者 飯城勇三

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1730-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします